釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和７年（2025年）12月１日発行　VOL 35

支え、任せ、背中を押す

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

29日（土）に「北中EXPO2025」が行われました。本校は総合的な学習の時間において「君たちは地域のためにどう生きるかプロジェクト」に取り組んでいます。生徒たちは50単位時間を通して、市井の人たちがどのような思いで仕事に向き合っているのか、その仕事が地域づくりにどのように貢献しているのか、そして、自分は将来の釧路のために何ができるのかを探究します。この壮大なプロジェクトの学びの成果を発表する場が「北中EXPO」です。当日は保護者や地域の皆さんはもとより、本プロジェクトでお世話になった企業等の皆さんにも御来校いただき、生徒たちの学びの成果を見守っていただきました。生徒たちは、取材した内容をスライドにまとめ、プレゼンテーションに臨んでいました。全ての生徒が見事なプレゼンテーションを披露し、学びの成果を伝えていました。生徒たちの学びを支えてくれた教師の皆さんの頑張りも見事でした。特に、本プロジェクトの中心となり、推進してくれたプロジェクトチーム（内海教諭、髙橋教諭、山本教諭、安彦事務職員）は、具体の企画・運営を担うなど、見事なマネジメント力を発揮してくれました。

ある教育局で教育支援課長を務めていたときのことです。着任後からすぐ職員が様々な相談に来ました。今年度の学校訪問、課内の研修計画、人材育成、教育局としての施策の推進に関すること。教育支援課長席の前には相談の順番待ちで主査や係長が並びます。

たくさんの相談とともに、ひっきりなしに電話がかかってきます。その間に決済ばさみが机上に積まれていき、気が付けば自席から職員の姿が見えないくらいの高さになっています。予定していた仕事には手を付けられず、決済ばさみの処理だけでその日の仕事が終わる日が続きました。「なぜ思うように仕事が進まないのか、精一杯やっているつもりなのに」と思いながらうつむいて帰宅していました。

それまでは、一人で何でもするのが教育支援課長、課の全てをマネジメントし、職員に指示できるのが教育支援課長だと思っていました。私が教育支援課長として勤務した教育局は小局でしたが、教育支援課長としてカバーできる範囲は限られると実感しました。主査・係長を中心にそれぞれの業務を進める分散型のリーダーシップの必要性を痛感しました。それから主査・係長のマネジメント力や課題解決できる力を育むため、課内研修において、現状分析や課題特定の方法、チームのつくり方や業務の進め方などのマネジメントの基礎や考え方を身に付けるワークショップを繰り返しました。

しばらくすると、主査・係長たちが自信をもって自走する場面が増えてきました。教育支援課長の指示ではなく、積極的に対応し、課題を解決したという報告も増えました。「〇〇の現状と原因なので△△の方向で考えています」と教育支援課長席に「確認」にくる頼もしさも出てきました。そんな姿を見る度に、「〇〇係長にお願いしてよかった」と伝えました。すると嬉しそうな表情を返してくれました。

着任当初、何でも相談に来ていたのは、教育支援課長から任せてもらえるか不安だったからだったのかもしれません。教育支援課長は一人職ですが「独り」ではありません。「北中EXPO」における教職員の動きを見て、校長も教育支援課長同様だと思いました。